

KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第 74 号 平成 25 年 7 月 20 日
編集・発行 神戸市立中央図書館

〒650-0017神戸市中央区楠町 7-2-1 (078)371-3351



理化学研究所 計算科学研究機構 スーパーコンピュータ「京」
(平成24年10月の一般公開時)

神戸医療産業都市

近年 iPS 細胞など再生医療分野の言葉をよく耳にします。

自分の皮膚から作った iPS 細胞で目の網膜を再生する研究、死後のマウスの細胞核からクローンを作る研究など、世界初の事例が神戸で生まれています。神戸の先端医療分野で何が始まっているのでしょうか。

一九九八年から取り組みが始まった神戸医療産業都市構想。ポर्टアイランドにおいて、先端医療技術の研究開発拠点を整備し、二十一世紀の成長産業である医療関連産業の集積を図る構想です。現在では基礎研究の機能を担う十四の中核施設と二百三十九社の医療関連企業・団体からなる日本最大のライフサイエンス分野のクラスターに成長しました。

さらに昨年、世界最速クラスのスーパーコンピュータ「京」が稼働開始し、大規模シミュレーションの場が備わりました。心臓全体をありのままに再現する研究や、創薬の候補物質を絞る演算など「京」による成果が次々に上がっています。

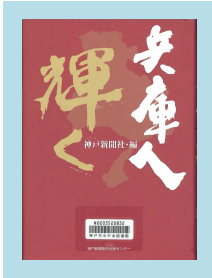
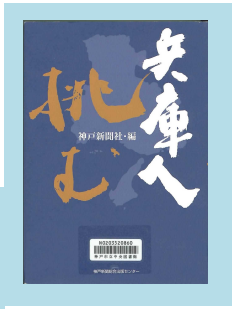
将来、マンモスのクローン蘇生など世界を驚かせるようなニュースが神戸から生まれるかも知れません。

兵庫人挑む／兵庫人輝く 神戸新聞社編（神戸新聞総合出版センター）

本書は、神戸新聞に二〇〇七年四月から二〇一一年九月まで連載された「兵庫人挑む」、「新兵庫人輝く」をそれぞれまとめたものである。

ここでいう兵庫人とは「兵庫に根差して生きる」「兵庫に来て新風を吹き込む」「兵庫での経験を生かす」人々のこと。

取上げられた人物は一六〇〇名を超え、文化人、アスリート、医療従事者、学者、建築家、芸能人、教育者等、多方面にわたる。全国的な著名人や、知る人ぞ知るその道の傑物たち。各分野で功を成し、なお挑戦を続ける兵庫人ひとりひとりの仕事ぶりと、そこから見てくる人生観は、どれも興味深い。



阪神電車―街と駅の1世紀 上野又勇編著（彩流社）

大阪と神戸を結ぶ阪神電車。その全路線を、思い出の情景でたどる写真集。

阪神電車は、明治三十八年に、国内で十四番目の鉄道会社として営業を開始。本格的な広軌、高速運転により、大都市間を結んだ日本初の大規模電気鉄道であった。駅間距離が短いのは、開業当時は集落ごとに駅を設置したためらしい。今は見られない阪神国道線の沿線風景も多数収録されている。

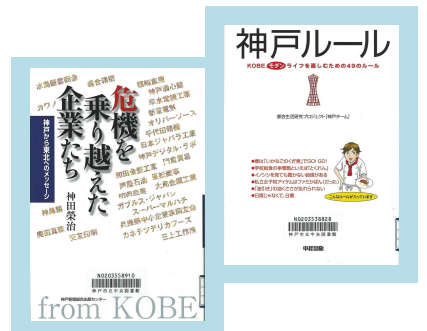
神戸ルール 都会生活研究プロジェクト「神戸チーム」（中経出版）

神戸っ子は「山がないと道に迷う」「自転車にあまり乗らない」など神戸特有の「ルール」が面白おかしく解説されている。計四十九のルールが「交通編」「買い物編」「食べ物編」「街なか編」「言葉・人間関係編」「生活あれこれ編」の六編として分類され、どのページからでも楽しく読める。神戸っ子なら、納得しながら読むことができる。そして、こんな神戸人気質をみんなに教えたいと思うかもしれない。

危機を乗り越えた企業たち―神戸から東北へのメッセージ 神田榮治

（神戸新聞総合出版センター）

神戸の中小企業経営者に、阪神・淡路大震災やリーマンショックなどの経済危機をどう乗り越えたかをインタビューしたもの。とりあげているのは二十四社と一団体。著者がインタビューを終えて見えてきたものは、経営者の早期決断や会社分散の必要性、従業員への力。さらに危機をチャンスに変えることや異業種との人脈。東北で被災した企業への応援だけでなく、危機に直面した中小企業に対するメッセージともなっている。インタビューの背景にある震災から最近までの兵庫県経済の動きや、県庁の職員として震災後の産業復興にたずさわった著者の回顧録も収録する。



わが母時実新子 母からのラブレター 安藤まどか（実業之日本社）

『サラダ記念日』と同年、一九八七年に出版されてベストセラーとなった川柳集『有夫恋』の作者が娘である著者へ四〇年にわたって書き継いだ手紙のエッセンス。

作家、母、妻、そして女としての自身の日々の思いと娘やその夫へのメッセージが綴られる。

一方で、娘の運動会よりも句会を優先した母に、川柳に対する一途さを子供心に認識させられたという著者の思い出なども語られる。

カナモノガタリ 神戸新聞三木支局編（神戸新聞総合出版センター）

三木といえば金物。三木の金物の歴史は古く、起源は五世紀にさかのぼるといふ。戦国時代には三木合戦により荒廃したが、豊臣秀吉の政策により金物のまちとして発展することになった。

播州三木打刃物は一九九六年に「伝統的工芸品」に指定されている。

本書は、職人の高齢化と技術の継承への危機感から企画され、記者が事業所を訪ね歩いて現状を調査した労作である。

丹波布に魅せられたひと 吉田ふみ
ゑ (北星社)

丹波布とは、丹波佐治地区で江戸末期から生産されていた木綿の織物で、地元でも忘れ去られていた。この本の主人公である足立康子さんは、昭和二十九年、婚家で天保六年の縮帳(見本帳)を目にして、その魅力に惹かれ、丹波布復活への行動を始める。糸紡ぎ、天然素材による染色、織り作業などは、すべて手作業のため、足立さんは途切れかけた技術を求めて人びとを訪ねた。そして獲得した技術を伝え続けた。



西区のたいこと獅子舞 神戸市西区
区制30周年記念写真集 神戸市西区
役所編集・発行

西区の文化財産である二十八の「布団太鼓」と十五の「獅子舞」を奉納先の神社名の五十音順に収録。神戸光影会の撮影協力による写真からは色鮮やかな意匠と熱気が溢れ出る。解説文は宮司、自治会長といった地元の方への取材にもとづいて編集され、巻末には交通アクセスと行事こよみがある。貴重な記録であると同時に、身近な伝統行事への参加ガイドランスとしても大いに活用してみたい。

神戸懐かしの純喫茶 芝田真督

(神戸新聞総合出版センター)

純喫茶とは、酒類などを扱わない一般的な喫茶店のこと。懐かしい昭和の佇まいを残しつつ、重厚だった家庭的だったりと、一軒が異なる魅力を持っている。しかしそんな店は、今ではずいぶん減ってしまった。

この本で紹介されるのは六十四店。店の人との会話や名物メニューが楽しく、各店の雰囲気も伝わってくる。街角の風景に馴染んだ喫茶店を改めて訪ねたくなる。

II その他の新刊 II

孤愁 サウダーデ 新田次郎 藤原

正彦 (文藝春秋)

木血泉 総特集 物語る夫婦の脚本

と小説 (河出書房新社)

鳥の領土 安水稔和 (編集工房)

ア)

ミナト神戸の宗教とコミュニティー

関西学院大学キリスト教と文化研究センター編 (神戸新聞総合出版センター)

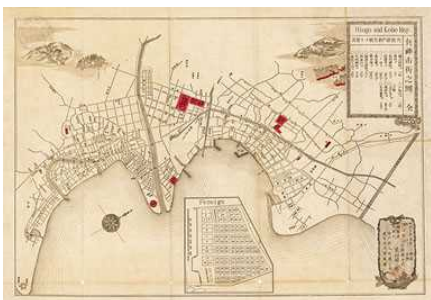
書庫探訪 その30

ひょうしんしがいのず 『兵神市街之図』 明治13年 (1880)

明治7年(1874)5月11日、神戸大阪間で鉄道が開通しました。『神戸駅130年史』によると、開通当時は1日8往復、翌年4月には10往復に増便されたそうです。神戸大阪間を1時間10分で運行しました。

本図は、鉄道に乗って神戸へやって来る人のために神戸の印刷所により作成された市街図です。

旧湊川をはさんで西が兵庫、東が神戸です。地図を見ると主だった道路や建物が記されています。そのほかにも、地図の下部分には居留地の区画



図、右上には、相生橋から、須磨寺や諏訪山温泉といった各名所までの距離が記されています。相生橋は日本最初の跨線橋(鉄道線路を跨ぐ形で架けた橋)で、下を通る汽車を見物するため多くの人が集まったそうです。この市街図を持って、神戸の名所を回ったのでしょうか。

神戸栄光教会

神戸には開港以降に建築された歴史ある教会がいくつもあります。なかでも兵庫県庁近くの神戸栄光教会は、そのゴシック様式による赤レンガの建物が古くから神戸市民に親しまれ、神戸の名所の一つにも数えられてきました。

この教会の歴史は、アメリカ南メソヂスト教会のランバス親子が明治十九（一八八六）年九月十七日に神戸居留地四十七番（現大丸東側）に創立した南美以美教会（みなみみい）に始まり、その後、信徒増加に伴い下山手五丁目（現兵庫県庁一号館の位置）に移り、大正十三（一九二四）年に現在の場所となりました。

教会の名称は、「日本メソヂスト神戸教会」から「日本メソヂスト神戸中央教会」へ改称。昭和十六（一九四一）年にはキリスト教諸派合同による日本基督教団成立に伴い「神戸中央教会」となりますが、「中央」の名称使用に異議が唱えられ、「神戸栄光教会」となりました。他の候補として「神戸中和教会」「神

戸聖泉教会」がありました。が、会員による投票の末、百八十五票中九五票を得て現在の教会名に決定しました。

明治二十一（一八八八）年に最初の会堂が下山手五丁目に建てられ、明治四十四（一九一）年に創立二十五周年を記念して会堂新築計画がもち上がりますが、諸事情により実現はなりません。『日本基督教団栄光教会百年史』には、その時計画された新会堂の完成予想図が掲載されています。



現在の神戸栄光教会

大正七（一九一八）年には再び会堂新築計画が始動、教会員で日本郵船建築技師の難波停吉（なみはていきち）が設計を担当しました。難波は当時新築されたばかりの東京霊南坂教会などの視察を行うなど尽力します。そして大正十三（一九二四）年に建物が完成し、献堂式が行われました。太平洋戦争が始まると、塔の白い

部分が爆撃目標になるということで先端部分が黒く塗られてしまいました。また軍司令部として接収されそうになったこともあり。さらには昭和十九（一九四四）年に地震で塔の十字架が倒れてしまう、といったエピソードが伝えられています。

戦後、牧師の斎藤宗治は、神戸市民に文化の灯を掲げ、音楽を贈ることを思いたち、合唱団を立ち上げました。この合唱団は後に「神戸土曜会合唱団」として活躍します。また同じ年に「神戸中央合唱団」も発足しました。これは栄光教会の元聖歌隊員が集まって結成されたもので、名前は旧名称の「神戸中央教会」にちなむものです。

斎藤はさらに音楽評論家の藤田光彦たちと協力して音楽同好会を作り、教会を会場として演奏会を多数企画しました。藤田は後に自身のSPレコードコレクションを神戸市立図書館に寄贈し、これが「藤田コレクション」となります。

これらの流れをくむのでしょうか、現在クリスマスライブに行われる燭光礼拝や復活祭では、教会聖歌隊による合唱と、有志によるオーケストラの演奏も加わり、いずれも教会員以

外にも開かれた催しとなっています。このように長らく親しまれてきた赤レンガの会堂ですが、平成七（一九九五）年の阪神・淡路大震災により倒壊し、しばらくは仮設テントで礼拝などの教会行事が行われていました。しかし震災の五ヵ月後には再建委員会が設置され、再建の議論が始まっています。そこでは皆が納得するまで粘り強い議論が重ねられました。平成十四（二〇〇二）年に再建案のコンペを行ったところ、半数の企業が以前の外観を基にした案を提出し、会堂再建の方向性が見えてきました。会堂は平成十六（二〇〇四）年に再建され、入り口の大階段をなくすなどバリアフリーにも対応。また会員の長年の夢であったパイプオルガンも設置されました。

震災後九年を経て復活した教会は、これからも市民に親しまれる存在になることでしょう。

参考文献

- 『神戸栄光教会七十年史』神戸栄光教会七十年史出版委員会
- 『日本基督教団神戸栄光教会百年史』神戸栄光教会百年史編集委員会
- 『写真による神戸栄光教会八十年略史』神戸栄光教会